

第 61 回 JIA アーバントリップ の報告

実施日 : 2009 年 10 月 28 日(水)8:00~19:00

テーマ : 「地方都市からの教育、行政、住まいに対する情報発信を体現する」
— 太田のぐんま国際アカデミー、栃木県の県庁舎、宇都宮の SUMIKA Project —

見学先 1. 学校法人 太田国際学園 ぐんま国際アカデミー

設計 : シーラカンスアンドアソシエイツ

講師 : 宇野 亨氏(シーラカンスアンドアソシエイツ)

2. 栃木県庁舎

設計 : (株)日本設計

講師 : 森林兵衛氏・合頭義理氏《日本設計》

3. SUMIKA Project by Tokyo Gas

設計 : 伊東豊雄・藤森照信・西沢大良・藤本壮介

講師 : 森山 ちはる氏(伊東豊雄建築設計事務所)

速水 清孝氏(藤森照信研究室)

西沢 大良氏(西沢大良建築設計事務所)

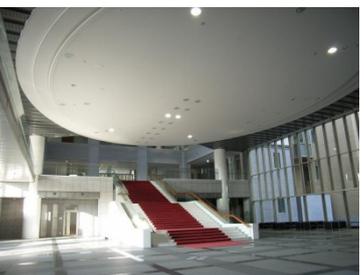
山野井 靖氏(藤本壮介建築設計事務所)

第 61 回コーディネーター 林 雅子 (ジャックジャパン)

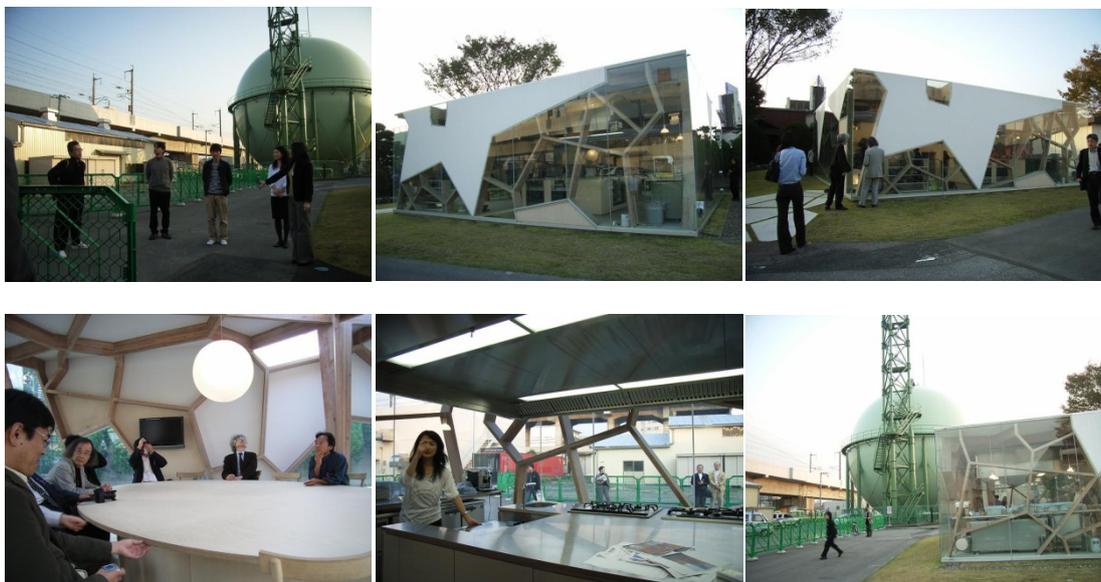
「学校法人 太田国際学園 ぐんま国際アカデミー」



「栃木県庁舎」



SUMIKA Project 「SUMIKA パヴァリオン」



SUMIKA Project 「コールハウス」



SUMIKA Project 「宇都宮の家」



SUMIKA Project 「House before House」



見学後記

今回は東京近郊を離れ、群馬県太田市と栃木県宇都宮市を訪れた。一つめの見学先は構造改

革特区の第一号認定、英語教育特区の小中一貫校として 2005 年に開校した「ぐんま国際アカデミー」。開校して 4 年が経過した学校を設計者の シーラカンス&アソシエイツ の 宇野 亨さんの話を伺い、見学。チームティーチング、オープンスクールなど設計者にとって前例のない学校をゼロから考え出す作業だったとのこと。周辺の町並みに配慮し木造でフラットに広がる校舎と青い空のコントラストが美しい。連続する平屋の各棟の筒に二つの中庭が用意され、どこでも授業が行なえるようになっている。多様な学習形態に対応できる場がちりばめられ、敷地全体にアクティビティが発生するように計画されていた。職員室は各棟に分断して配置され、すべての場所に先生の目が行き届くように配置されている。生徒が先生へ気軽に話し掛けている姿がそこかしこで見られ、微笑ましくいきいきと目を輝かせ学校生活を楽しんでいる印象を受けた。

二番目の見学先、栃木県庁舎へ移動。先進的な建築手法と数々の新しい試みを取り入れた設備のシステムとなっている。設計された株式会社日本設計 の森 林兵衛さんに説明、案内して頂いた。一階県民ロビーは、東西両側にある中庭から入る自然光で明るく、広がりのある空間が圧巻。壁面には県を象徴する大谷石と並木杉が使用されあたたかみのある吹き抜け空間となっている。15 階の展望ロビーには益子焼陶板が壁面に使用され、ほかにも床や壁、外構等に烏山和紙、藍染め、雲井織、日光彫、木材組子、フレスコ画、芦野石等県産品、県産材の活用が多くなされている。またエネルギー負荷を抑制し省エネルギーを図るとともに、自然エネルギーおよび雨水を利用し環境に配慮された環境問題の先導的な役割を担う建物となっている。

次にバスにて三番目の宇都宮市の住宅街に建つ SUMIKA Project の場所へと向かう。このアーバントリップを後援して下さっている東京ガスが提案した SUMIKA Project の見学を予めから希望しており、それが実現する運びとなった。東京ガスが提唱する「五感を楽しむ生活」を具現化し、「ガスのある、人が主役の本物の暮らしを提案する」住宅を 4 人の建築家が提案した。

まずはインフォメーションセンターとなる《SUMIKA パヴィリオン》へ。今回のプロジェクトのプロデューサーである伊藤豊雄さんの作品を見学。ガラスと蜂の巣やカエルの卵、枝葉からの発想で作りに出された美しい六角形の幾何学模様の構造体が印象的、その下にあるのは木陰の趣。自然と人が集まってつくり出される、心地よい場を空間化した建物となっている。

次は建築史家でもある藤森照信さんの《コールハウス》。パヴィリオンから 10 分ほど歩き、住宅地の坂を登ると焼杉張りの家が見えてくる。ぼかんと口を開けたように見える建物。設計者は洞窟こそが住まいの原型と考え、大きく開いた入口部分から奥に向かってすぼまり、奥は暖炉の火があかあかと燃えるつくりとなっている。中に入り腰を下ろして窓の外や暖炉の火を眺めているうちに、ほっとして大地に包まれるような深い感覚が訪れた。

その後また 10 分ほど住宅街を歩いていくと、大きな屋根で覆われた平屋建ての西沢 大良さん設計の《宇都宮の家》と、白い箱が積み上げられた藤本壮介さん設計の家が見えてくる。西沢さん本人から話を伺うことができた。今回のプロジェクトのテーマであるプリミティブな暮らしに必須なものとして、西沢さんの頭に浮かんだのは太陽の光。それも壁に開いた窓から入る横向きの日差しではなく、頭上から光が降り注ぐことに関心があったとのこと。生み出された住まいは、光を透過する大きな屋根で覆われた平屋建て。建物周囲はほぼすべてが開閉可能な建具で窓がなく、頭の上だけで自然に向けて開かれ開放感がある。家の中のより明るい場所を求めて移動することで、自ずと生活のリズムが形作られるという、光とともにある暮らしの提案がなされている。

最後は隣に建つ藤本壮介さん設計の《House before House》。一辺約 2.5m の箱、合計 10 個を 3 層に積み上げてつくられている。箱の連なりの内外には縦横無尽に階段が張り巡らされ、いくつかの箱のてっぺんには落葉樹が植栽されている。内部は住空間のサイズとしては小さすぎるかに思われるが、実際に入ると不思議なほどに小ささを感じず、何かに守られているようなほっとした感覚を感じる心地よさのあるすまいだった。迷路のような階段をよじ上ったり、ほかの箱の上を歩い

たりするにつれて、くるくと景色が変わり、いつの間にか内部と外部が反転していくことに驚く。これからの家の方向性を示唆するように感じた。

今回のアーバントリップは設計に携わった方々から直接興味深いお話を伺いながらの見学であった。あっという間に時間が過ぎ有意義な一日を過ごさせて頂いた。後援の東京ガス、協力いただいた国際通信社の方々に御礼申し上げます。

米村 ふみ子 (有) ヨネムラアーキテックススタジオ Bulletin(ブルテン) > 2010年2月号 より